

倉橋先生の

「保姆と詩感の教養」を讀みて

宇 都 野 研

倉橋先生

あなたの「保姆と詩感の教養」を面白く拜見しました。『玉の杯底なきが如し』といふ言葉を美化なすつたあなたのウキツトにはさすがの兼好法師も舌を捲かうと思ひます。

幼児の心の特質は粗野ではあるが、原始的の粗野である。その裏面には一種の繊細とこまやかさがあつたが、それこそは詩感だといふ意味のお言葉をおもしろいと思ひます。

詩感はいひ換へると驚異感です。物にどろき得る心といへませう。勿論、利害關係からの驚きではありません。さういふ日常生活から来る利害得損の念一切をのぞき去つた驚きです。今、バツと眼を開いて、世界を見直した心持です。いはゆる概念的反省を拂拭し去つた心持です。さうした心は何れの幼児にも宿つてゐる。

保姆にも詩感をとの御注文は、つまりこの驚異感をもちつけよとのことで、新らしく或物を所有せ

よといふのではなく、以前持つてゐたものを取返せといふことに過ぎない。

驚異感を取返す、即ち詩感をもたうとするのは、心の純粹さを失つてゐない者にとつては何でもないことです。たゞそれを失つた者にとつては永久に失はれた心の故郷です。

私ども、拙いながら歌をよんでゐる者は、幼年時代を大抵、詩歌の雰圍氣のうちに送りました。そして大成した歌人の凡ては、いづれも少年時代に歌を詠み得た者ばかりです。これらの事實は詩感を植ゑつける、或は、より正しくは、詩感を失はないやうにするには、幼少な時代の理解ある教養が最も大切だと思はれます。この點からも、あなたのあの一文をありがたく思つてゐます。

私の書かうと思つたのはこれだけです。しかし、私も幼児相手のお醫者で、皆様とまんざら縁のないこともないやうです。私が幼児に對してどんな感々發してゐるか、そしてそれをどんなに表現してゐるかを、序ながら見て頂かうと思ふ。作のたわいのないのは豫め御勘辨を願つておきます。

○

刺らでも、八束白髻生ひしめよ弄りものによきをと子のいふ

胡麻鹽の髻なるものを八束髻白くあれとやまさぐらんとや

訥辯で、奇抜なことをいふ私の三男です。何處で見て來たのか、ある日、一緒に晚餐の卓を圍んでると、しげ／＼私の顔を覗きこんで

『お父さんも膝まであるやうな白髯を生やさないか。いぢつてみたいんだ!』

卓をかこんだ一同が思はずふき出した。鬢髪に白いものをまじへたその父も微笑を禁じ得なかつた。心のうちでは——之からだと思つてゐるのになあ——といふ一味の淋しさもあつた。

○

わがまへに立ちて物言ふをさな子やひたぶるにしも目をみはりをり

何をかをいひつつ眸をかじやかすをさな子の顔たゞに見てをり

をさな子の言のこゝろを解きがたみ大きな頭わがなでやりつ

をさな子は言としがたき心もてりすがしき眸をたゞにかじやかす

やはり、三男のよませた一連ですが、數年前のものです。言語發生の極めて遅い子でした。そして輕度のどもりでした。私には何よりもその清々しい白眼と輝かしい瞳とが可愛かつた。いつたい、人間の心が純粹である間はいつも白眼が清く光澤を帯びてゐる。この子の眼がまさしくさうだ。ある時、この清らかな眼の訥辯家は私の前につつ立つて何をか云はうとあせつてゐたが、訥々として言語とならない。そしてその眼は異常に輝いてゐた。『眼は靈魂の窓だ』といふ言葉がこの場合にふさはしかつた。私はそのかじやかしい眼から彼の表現し得ざるある尊い「驚異感」を直覺した。

○

日曜はまるく薬を休めと云ふ此の子やんちやと今も思へるを

のびくと一日もあり得ぬ窮屈さをその父の上に感じをらし

窮屈さも本性となれば苦にならぬをさな心に移して思ふな

之は最近のものです、やはり三男がよませました。醫者の悲哀といつたやうのもの、さうしたものを幼年の子に知られてゐやうとは思ひませんでした。また知られたくもなかつたことです。それを眞つ正面から、思ひもけず切り出されるとたゞくとせざるを得ません。幼児の直観は鋭い。(とはり)

宇都野研氏は醫學博士として御専門の小兒醫界の權威であられると共に、また歌道の大家なることは皆様御存じでいらつしやいませ

う。